

# 入園からクラス替えに至る幼稚園児の様子： 保育者の視点から見たクラスに「なじむ」と子ども達の発達

Children's Adjustment and Development from Entering  
Kindergarten to Class-Change:  
Teacher's Viewpoints

大野 和男  
Kazuo OHNO

本研究では、幼稚園児が入園し、年中児になってクラス替えに至る過程を検討した。クラス担任保育者に各学期末に面接を行い、クラスの様子と、子どもごとの様子について尋ねた。その結果、入園時の方がクラス替え時よりもクラスになじみにくい子どもが多かった。クラス替え時には、担任が替わった場合の方が新しいクラスになじみにくい子どもが多かった。新しいクラスになじんでいくと、新しいクラスの友だちとの関係が中心となることから、幼稚園生活においてクラスの重要性が示唆された。

また、保育者にとって、生活習慣の確立や幼稚園に楽しく来ることが前提であり、その上で子ども同士の関わりが成り立つと考えられているようであった。さらに、クラスの中のリーダー的存在の子どもには、クラスを引っ張っていくことも願っていることが推測された。

以上のことから、クラスになじむことには、担任保育者の存在、友だちの存在、そして本人の気質が関係することが示唆された。

【キーワード】 クラス替え、移行体験、保育者、集団と個

## 問題

### 1. 家庭生活から園生活へ

年少児は、新たに幼稚園という場で集団生活を始める。彼らは、初めての社会集団である幼稚園・保育園などへの入園という大きな「移行体験」をする(石川, 1998)。幼児期は、母子関係および家庭での人間関係から仲間集団や幼稚園・保育園の保育者へと、人間関係が飛躍的に広がる時期である。子どもが集団生活を体験し始めるこの時期は、新しい世界への期待と不安をあわせもちながら、生活の場や人間関係を広げ、信頼できる大人との関係を基盤にして、同じくらいの年齢の友だちとともに、さまざまな活動経験を積んでいく時期だといえる(多々内, 2001; 上垣内, 2009)。

つまり、幼稚園は、多くの子どもにとって、人生ではじめて意図的・組織的な教育を受ける場である。幼児期の早い時期に集団場面にさらされることの直接的で長期的な影響は、知能得点、学業成績、相互作用過程に反映されるのではなく、子どもがおこなう巨視的活動の性質や多様さに反映され、さらに大人や仲間に対する行動や関係に反映される(Bronfenbrenner, 1979)。

子どもは幼稚園で、先生という存在に出会い、同年齢・同世代の何十人という子どもたちと一緒に幼稚園生活を送る。幼稚園では、それまでそれぞれの家庭で生活していた子どもを、集団関係の中に取り込み、集団の一員として扱っていく(結城, 1998)。そのような幼稚園に、子どもたちは、緊張も不安も

入り交じって登園してくることになる(多々内, 2001)。

こういった新たな環境への移行、即ち、幼稚園に入園することや新学期における新たなクラスに「なじむ」過程は、子どもによって異なる。そのような新しい環境に誰もがスムーズにとけ込めるわけではない。同じ環境にあっても、子どもが受ける影響は様々であるし、集団の中で、相互に影響を与えながら生活していくことになる。子どもの示す行動は、本人の意図ばかりでなく、それが生み出される環境としての仲間関係、活動の流れ、クラスの雰囲気、本人の生理・身体的状況、家庭状況、天候・気候などの関係と状況に依存し、その時のさまざまな要因が反映されて生じるものである(上垣内, 2009)。

### 2. クラス集団の意味

幼稚園に通うということは、幼稚園という集団に入っていくことを示す。しかし、実際には、子どもたちは、幼稚園の中だけに絞っていても、複数の集団に所属することになる。幼稚園には様々な集団がある。結城(1998)は、集団の持続性から編成様式をとらえた場合、①基本的に再編のない固定的な集団単位、②再編は可能であるが一定期間固定される集団単位、③活動ごとに頻繁に再編される集団単位があることを指摘している。そして、その持続性と再編方法は、①属性を基準とする場合の属性の性質、②先生の教育的意図、③活動そのものの特質、によって左右されるという。

結城(1998)がフィールドとした幼稚園では、10種類の集団単位が存在した。それは、①幼稚園、②学年、③学級、④性別グループ、⑤座席グループ、そして、カリキュラム活動を前提としたグループ(⑥リトミック、⑦鼓笛、⑧劇、⑨お茶会、⑩ゲームなど)である。特に、カリキュラム活動を前提とする集団単位は、学年が上がるに従って、増えることを見いだしている。そして、その集団単位にはそれぞれ活動場面が存在し、先生が子どもに使う呼称と子どもが共通して身につけていた色や物を、それぞれ「言葉としてのシンボル」「物としてのシンボル」として整理している。子どもたちは、個人名で呼ばれるだけでなく、その集団を示す言葉で呼ばれることによって、また、物理的に位置づけされることによって、その集団の一員という意識を持っていくと思われる。

これらの中で、「クラス」は最も重要な集団単位である。集団を示す言葉としては、「〇〇ぐみさん」という形で子どもたちが呼ばれる機会が最も多いであろう。4月にクラスが編成されると、最低1年間は同じクラスで園生活を送ることになる。幼稚園において「クラス」という単位は重要であり、子どもにとって大きな意味を持っていると思われる。

さて、同じ3歳といってもその発達の様相はさまざまである(石川, 1998)。さまざまな子どもが1つのクラスの中に存在する。その集団の構成員は決して均質ではなく、さらにいえば最初は「集団」ではなく、「個」がそこにいる状態にすぎないのであって、「集団」は教師の援助によって形成されなくてはならないという「集団」というものに対する考え方を見直しを保育者へ促すものである(芦田, 2009)。

このことについて、幼稚園教育要領(2008)でも、幼稚園教育の基本において、環境を通して行う教育を基本とするとともに、それに関連して重視する事項として、「幼児期にふさわしい生活」「遊びを通しての総合的な指導」「一人一人の発達の特性に応じた指導」の3点が挙げられている(上垣内, 2009)。この「一人一人の発達の特性に応じた指導」に関して、幼稚園教育要領解説(2008)では、「教師は幼児一人一人の発達特性と発達課題を把握し、その幼児らしさを損なわないように指導することが大切である」と述べられている。保育所保育指針(2008)でも、ほぼ同様に、「保育の方法」として、「子どもの発達について理解し、一人一人の発達過程に応じて保育すること。その際、子どもの個人差に充分配慮すること」が言われている。保育者が子どもを指導・援助する際の重要な前提として、一人一人の発達の特性と発達の課題の把握および発達過程と個人差への配慮があるということである(上垣内, 2009)。一人一人さまざまな個人差を持った子どもが1つのクラス

で生活し、さまざまな活動をしていく。そのことによって、お互いに影響し合い、発達し、クラス集団としての成長を見せていくと思われる。

### 3. クラス替えの意味

園によっては、学年が上がる際に、クラス替えを行う場合もある。1年以上、同じクラスで園生活を送ることによって、子どもの1年間の成長や友だち関係、クラス運営などが考慮され、友だち関係の固定化を防いだり、環境の変化への対応力などを育てることを目的に、クラス替えが行われる。その場合、今までのクラスメイト・担任と離れ、新たなクラスでスタートする。多くの場合、年少時の1年間の子どもたちの様子を見て、月齢、男女比、子どもの個人差を考慮しつつ、意図的に新たなクラスとして再編成される。子どもたちにとって、幼稚園という大きな意味での物的環境には基本的に変化はないものの、クラス名が変わり、保育室が変わる。クラス集団という意味では、1からのスタートである。クラス替えには、担任の変化、クラスメイトの変化という人的環境の変化が存在する。大野(1998)は、クラス集団がすでに形成されているクラスに転入してきた子どもを観察し、転園当初はひとり遊びが多く、徐々に減少していくこと、関わる子どもは同じクラスの子どもが多かったことを明らかにしている。

このことは、それだけ、子どもにとってクラス集団というものが重要な意味を持つということの表れであろう。子どもたちは、クラス替えによって、入園時と似たような状況に置かれることになる。新しい環境への適応という発達課題を与えられることになり、それを乗り越えることでさらなる発達が期待される。

### 4. 保育者の存在

保育者は、そのクラスの子どもたちにとって最も身近な存在であり、家族以外では最も接している時間が長く、縦断的に子どもと関わっている存在である。しかも、家族と違って、それぞれの子どもを把握しているとともに、クラス集団全体も把握している。即ち、クラス集団の中での子どもの位置も同時に把握できる存在である。保育者は、個としての育ちの面と集団としての育ちの面の両面を見ていく必要がある(永田, 1992)。

このような子どもの発達の姿をとらえるには、微視的な発達ではなく、子どもの全体的な発達、いわゆる「子どもの育ち」をどうとらえるかであろう。子どもは、日々の生活の中で様々な姿を見せる。時には、発達段階からすると、戻ってしまったかのような姿を見せることもあるだろう。様々な面で、行きつ戻

りつしながら、大きな流れとしては発達していくことができる。このようなことは、ピンポイント的な観察を行うことで捉えることはできない。たまたま観察したことがその子どもの全体性を表しているとは限らないのだ。子どもはその時々でさまざまなふるまいを見せる。その間には必ずしも一貫性はない(氏家, 1996)が、その子の特徴の1つであることは間違いないだろう。その子らしさは、そういった1つ1つのエピソードの積み重ねによって生まれてくるのであろうし、そこに思い入れがあるはずである。氏家(1996)によれば、「それを排除することはおそらくできないし、排除してはいけないものかもしれない。なぜなら、我々が目の前で展開する出来事を見ていろいろな想像を巡らせることができるのは我々が多くの事実を単に知っているからではなく、そのできごとに深く関与しているからである」。つまり、子どもの全体的な発達を把握するのに最もよい方法を模索する必要がある。おそらく、できるだけ多面的に子どもと関わり、継続的に子どもを見ることが必要であろう。そんな中で、複数の子どもの発達について、把握するのに最も適した存在は、保育者ではないかと思われる。

ところで、子どもが園でのスキルを身に付けていくには、そのクラスの保育者の影響があるはずである。保育者の思い入れが、クラス集団を形成するのに重要な意味がある。ひとりの保育者が、その子どもをどのように理解しどのように関わるかによって、その子どもの心の発達のありようも変わっていくと考えられる(今井, 1992)。例えば、新入園児のいるクラスの保育者は、子どもが少しでも早く安心して幼稚園生活を過ごせるように配慮する必要がある(岩崎, 2009)。

また、保育には、保育を支える親や保育者の信念が重要である。大人の側の知識の中核がこの種の子どもや発達に対する見方であり、保育への情熱や関わり方を作り出していることだろう(無藤, 1992)。子ども理解の枠組みは、あらかじめ持っている子供観、発達観、教育観と大きく関わっていることはもちろん、見る人の保育経験、生育・文化的環境、生活・社会環境、人生観、世界観にいたる価値観と切り離せないものである(浜口, 2001)。飯島(1991)によれば、保育集団における対人行動は、幼児が環境に慣れるように試みようとする教師がどの程度努力するかによって左右され、保育を受ける子どもの数と保育者の人数との関係、保育者の保育経験や価値観によって異なっているという。保育者は、子どもたちに思い入れを持って接し、一人ひとりの子どもを把握し、クラス集団内での子どもの位置を捉えていると思われる。

## 5. 本研究の課題

このように考えると、クラス集団を形成していく上で、1学期という新年度の最初の時期は重要である。大野(2009)は、1学期における集団の形成と子どもの発達について、保育者によるコメントと子どもたちに対する評定などから多面的に検討している。それによると、年少児の担任にとって、クラスの子どもたちが園生活になじめるかどうかということが重要なことを占めていると思われた。クラス替えがあった年中組では、新しいクラスになじめるのかということが保育者にとっても子どもにとっても重要な課題であった。実際に、4月当初に不安な行動を示すことは、担任が替わらなかった子どもより、担任が替わった子どもや年中から入園した子どもの方が多かった。1学期は、幼稚園児にとって集団形成期であり、この時期特有の様々な問題が起こりやすいということが言え、そういった問題は、1学期の間に解決されることが示唆している。

そこで、本研究では、入園し、クラス替えを経験する過程を追跡し、子どもたちが適応していく過程を検討する。入園し、幼稚園に、同時にクラスになじんでいく中で、子どもの姿を保育者の視点から示す。そして、一度作られた集団が再編成される中で、子どもたちが新しい集団にどのように入っていくのかを検討する。言い換えれば、4月に入園した子どもが年中児になっていく過程を追い、クラスとそのメンバーとしてのそれぞれの子ども様子を明らかにすることによって、クラス集団と個の発達の過程を検討する。また、保育者が、それぞれの子どもに対して、どのような思いを持って保育を行っているのかについて、縦断的に追うことによって明らかにしていきたい。

## 方法

### 1. 調査時期と対象者

M幼稚園2007年度年少クラス入園児を対象とした。筆者は、この園に週1回程度伺い参与観察を行っており、子どもの様子のある程度把握している。年少時1学期の時点で、H組・B組とも15名(男児11名・女児4名)であった(Table 1)。年中になるときにクラス替えがあり、担任がH組→Y組、B組→Z組と持ち上がった。担任が替わったのは、13名(男児9名・女児4名)であった。年中1学期の時点で年中Y組16名(男児11名・女児5名)、年中Z組15名(男児10名・女児5名)であった。年中から入園した園児は、2クラス合わせて男児3名、女児2名、計5名であった。

なお、この間、途中一時休園や転園した子ども、満3歳で前年度から登園していた子どもや、分析には

Table 1. 年少と年中のクラスごとの対象者数

		年中		n	N
		Y組	Z組		
年少	H組	7	7	2	16
	B組	6	6	5	17
	n	3	2	0	5
	N	16	15	7	38

\* 網掛け部分がクラス担任が変化したパターンを示す。

\* nはその学年時、不在だったことを示す。即ち、転出児および年中からの転入児である。

Table 2. 学期ごとのクラスの様子

	H組	B組
T 1	<p>4月はいつもの年少さんのようにお友だちとかお母さんといた。比較的、すわること、お話を聞くことは好きみたいで、紙芝居とか聞いていた。男の子の方がかたづけが好きでお手伝いとかもやってくれている。自分のこともわりとできる子がいると思う。着替え、お弁当の用意とか、できる気がする。手がかかる子もいるが。</p> <p>(遊びは)粘土遊びとか、部屋ではままごととか。外でも、ままごと、水遊び、スクーターとか、広告で剣を作ってあんなまんごっこ、ブロックで作って、ヒーローごっことか。</p> <p>途中、参観日とか入ると、お母さんって子が何人かいた。お昼寝もよくするし、ご飯も食べたり。オムツの子もいたが、8割方とれた。</p>	<p>最初なので、入園当初はお母さんと離れることを嫌がる子もいたが、大分慣れてきて2か月くらいで好きな遊び、粘土、ブロックをやるようになった。近くにいる友だちに目を向けるようになった。今では関わりが出てきたところである。</p> <p>遊びも年長さんとかのをまねたり、工夫するようになってきた。</p>
T 2	<p>休み明けはそれぞれ、泣く子もいたり、調子を崩す子もいたり。友だちと遊び始めていたりした。8月から再開した子が、今までと違う友だちが入って違う雰囲気になってきた。9月に満3歳児が入って、また違った。全体的に落ち着かずというのが一時あった。</p> <p>運動会の練習はよくやっていた。10月、遠足があって、自分のことができるようになった。生活リズムが戻ってきた。朝の支度帰りの支度も自分でできるようになった。活動量も増えてきた。よく動いて遊ぶようになった。先生の手元から離れて、気の合う子ができてきた。11月はそんな感じだった。男の子が特に、3人前後くらいで継続したりいい関係を保っている。女の子の4人はままとまりながら一緒に遊んだり。10月、体を動かす。11月、製作遊びが盛んだった。他の子から刺激され、作ったり切ったりが多かった。いろんなものを作って遊んでいた。</p> <p>2学期の途中からぞうきんがけを始めて、帰りの時間にぞうきんがけして、喜んで習慣になってきた。お弁当も時間で食べられるようになってきた。ほんとにゆっくりだったが、大分よくなった。生活が比較的安定している気がする。まとまって遊び始めた気がする。</p>	<p>運動会という大きな行事があり、スタートも順調で、泣いたりする子もいなくてスムーズだった。運動会を通してみんなで何かをしようと、友だちを意識するようになって、関わりが強くなったかなというのが9月の印象だった。</p> <p>それがあって、一段落して、その後ゆったりと遊びを深められる時期になった。友だち関係が固定し始めてきた。友だち同士と一緒に遊ぶ楽しさがわかり始めてきたのではないかな。</p> <p>でも、反面友だちと遊びたいが、加減ができないので、ものの貸し借りだったり、口調とか相手を思いやるという部分までいかなない。遊びたいけど思いは通したいがお互いにあるので、そこが今の時期の成長だと思う。これから、日々の中で子ども自身が気づいて学んでいく部分と思っている。</p>
T 3	<p>2学期後半から友達との遊びが増えてきて、友だちを求めている。一緒にしていることが楽しいようで、誰かが隣りにいてほしい、と友だちと遊びたいというのが強くなった。日替わりだったり、ずつこの子とかパターンは人によって違うが。16人いたら、4つくらいの遊び、2つくらいになったり、わりとそんな感じで遊んでいる。カルタとか、文字とか、室内で遊ぶことに興味が出てきた。子どもたちが、年中長児がしていることをまねしたいというのが強くて、クリスマス会に見たら、その導入が楽だったり、「やってみたい」が強かったり。ひなまつり会でも、鉄棒や縄遊びを見たらそれをやりたい。憧れとか自分たちでもできるかなというのがあるのかもしれない。</p> <p>わりといざこざもなく(チョコチョコとしたものはあるが)、自分たちが解決し始めたのかH組の仲間という意識が出てきた気がする。</p>	<p>3学期は子どもたちの関係は安定してきて、この子と遊びたい、こういうことをしたいというのが具体的にできてきて、剣を作って戦いごっこ、設定を細かく考えて、おうちごっこ遊びを展開している姿があったという気がした。いろんな生活習慣面でもできるようになってきた。</p> <p>言葉かけをしなくても身の回りの整頓、かたづけができるようになってきたというのを感じているところ。けんかは多いが。</p>
	Y組	Z組
T 4	<p>クラス替えもあったが、比較的スムーズにスタートした。今までのクラスの関わりにとまどう子もいたようで、自分の場所が見つけられないことが最初のうちはあった。今までのB・Hの遊びの雰囲気が違ってとまどった。H色B色がかった。特定の子どもの大声が気になった。自分のことを出せない子がいたり、とまどいがあった。</p> <p>活動するようになって、(大声を出す子が)落ち着いてきたので、クラスができてきた。</p> <p>新しい子どもが3人入って幼めな感じで、年少さんに近い感じがあって、活動するときに、同じようにスタートができず、1年之差があるというのを感じた。友だち関係できてきて、遊ぶようになってきて、女の子で一人遊びがいいみたい子がいるが。他の4人は固まりだして遊ぶようになった。男の子は、2・3グループというB・Hの新しい子の集団化が見られた。生活は落ち着いている。実習生がいたときはいけなかったが。</p>	<p>クラス替えした当初は緊張している子が多かった。元B組の子はそうでもなかったが、H組からの子の方が動揺が大きかった。顔は見たいことあるみたい(様子が見られた)。緊張していた子がいたり、警戒心が強かった子がいたり。元B組の子は、仲がよかった子が離れたので、誰と遊んだらいいのかわからなかった。</p> <p>それでも1ヶ月したら、わりとお互いがわかってきたのか、関わり始めた。話し始めてしまえば、あつという間な気がするが。すっかり今は混ざった気がする。</p> <p>新入園児も、わりとよくわからないままスタートしたので、ついていくのが精一杯だったかもしれない(何とかやっていた)。</p>

含まれていないが、今年度年少クラスに編入した子ども(2名)も存在した。転出児、年中からの新入児は、分析によって除外された場合もある。

## 2. 調査方法

それぞれの子どもの様子について、クラス担任保育者に面接を行った。面接は、各学期末に行われた。最初に、クラス全体の様子を尋ねた。その後、それぞれの子どもについて、①これまでの様子、②気になること、③よくする遊び、④関わりが多いお友だち、⑤遊びの中での役割、⑥ぶつかるとお友だち、⑦来学期に向けての先生の願い、という7点をお聞きした。基本的には、この順番でお聞きしたが、子どもによっては話の順番が変わったり、混ざる場合もあった。

面接内容の記録は、パソコン入力によって行われた。面接をしながら同時に入力を行った。できるだけ、話したとおりに入力するよう心がけた。面接時間は、1クラス1回につき、約2時間であった。

## 3. 分析方法

面接で得た情報のうち、年少1学期(以下、年少1学期から年中1学期にかけて、順にT1、…T4と示す)を中心に、クラス全体の様子を検討した。

次に、子どもが幼稚園またはクラスに「なじむ」ということについて、①これまでの様子、②気になることについてのコメントから引き出した。

さらに、T1からT4の各時期で、保育者が子どものどんなところが気に入り、どんな来学期に向けての願いを持っているのかについて検討した。

なお、分析には、SPSS Statistics 17.0を用いた。

## 結果及び考察

### 1. クラス全体の様子

Table 2は、年少1学期から年中1学期にかけての各学期のクラス全体の様子を示したものである。H組では、年少1学期において、生活習慣の進歩や友だち関係の広がりが見られるようになる。2学期になると仲間意識が芽生え、関係が安定してきたことが述べられている。3学期には、友だち関係の安定と発展が述べられた。これらは、言い方に違いはあるが、B組でもほぼ同様であった。

そして、クラス替えが行われた年中1学期では、年少時に述べられてきた内容とは少々異なることが述べられた。新入園児が入学してきたため、彼らの様子や、そのことを含む新しい友だち関係の形成や年少時のクラスによる雰囲気の違いについて述べられている。ここで読み取れるのは、クラス集団の重要性である。ほとんどの園児が年少から通園し、クラス替えが行われたわけであるが、そのクラス替えによって新たな人間関係が築かれ、安定するまで多少の時間が必要であった。

このように、クラスという集団が子どもの友だち関係や気持ちの安定に重要な意味があることがわ

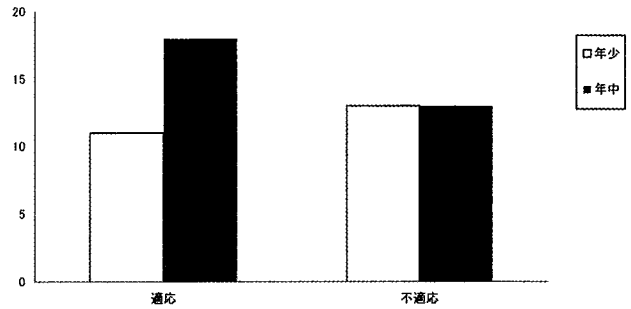


Figure 1. クラスへの適応

かる。このような入園及びクラス替えの混沌とした状態も、2クラスのコメントからすれば、園生活に2か月前後、つまり5月頃には慣れていっていることが伺える。

### 2. 子どもがクラスに「なじむ」こと

クラスに「なじむ」とは、どんな子どものかを示すのであろうか。保育者は、「なじむ」ことに関する表現として、具体的には、泣く、不安を示す、緊張、母と離れられないなど、様々な形で述べた。

年少時の1学期のときに、「なじむ」のに困難さや波を示した子どもは、2クラス合わせて13名、54.2%であった (Figure 1)。

それに対して、年中時の1学期の時点で、「なじむ」のに困難さを示した子どもは、全体の35.5%、11名であった。年少時と年中時の1学期の間になじみにくさの人数に差があるかどうか検討するために、カイ2乗検定を行うと有意ではなかった ( $\chi^2=1.78$ ,  $df=1$ ,  $p>.05$ )。年少時、「なじむ」ことに問題がなくても、年中時の新しいクラスに「なじむ」ことに困難さがあった子どもも4名、全体の16.7%存在した。

次に、年中時1学期の「なじむ」ことについて、担任の変化、そして新入園という3グループごとに「なじむ」ことについて困難であったかどうかを検討した (Figure 2)。担任が替わらなかった子どもでは、「なじむ」ことに困難を示したのが2名、15.4%に対して、担任が替わった子どもでは、8名、61.5%が「なじむ」ことに関して保育者にとって気になる様子が見られた ( $\chi^2=1.67$ ,  $df=2$ ,  $p<.05$ )。また、年中時に新入

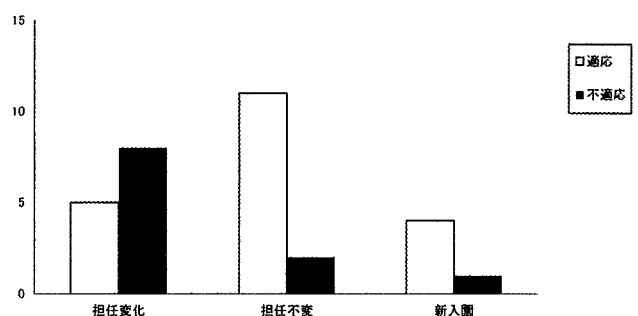


Figure 2. 担任の変化と適応

Table 3. 各パターンの事例(1)

移行パターン	ID	質問	年少時クラス	年中時クラス	T1	T2	T3	T4
満3歳入園	IA2	様子			前からいるので、年中にいることがほとんどだった。最初ばらに入ってこなかった。名前を覚えてきたり、クラスに入って遊び始めてきた。わりと安定はしている。	B組にいることが多くなった。友だちと遊ぶことに楽しみを見いだした。運動会とかも経験が、楽しみにできた。排泄面でも、遊びに集中すると、ダメだったが、着替えをするようになった。失敗の回数が減ってきた。クラス内の友だちに目が向けた。他の子にとって、I A 2は幼稚園が長いのでおもしろい。充実した2学期という気がする。	幼稚園生活も長く、安定して通ってきてる。ゆりとはばらを行き来しながらやっている。いろんなものを作ったりしては、お道具箱にしまい、というのが出てきた。しまいぐせがある。あいかわずかなという感じだし、安定してきてるかなという感じ(がする)。	マイベースで、クラスが替わっても、自分で淡々と行く感じ。自分のベースで過ごしていた。
		気になること	b	y	排泄がちょっとあまり(できない)かなっていうところは気になる。	そんなにはない。比較的友だちとの関わりもよく、排泄も自立してきたが、いろんな物を失敬する癖がある。これは必要ないと思うのも、ため込んだり、おうちに持って帰ろうとする部分がある。	B組さんの子とも仲がいいが、支えがY組だったりすると。来年やってく中で変わっていくとは思。ものをしまうのはいいが、いいなと思うのを隠したりが出てきている。大量の折り紙を持って行ってしまったり、友だちの持っているティッシュを知っているのに持っていく。言われると返すものの、手癖が気になる。いいなと思ったものを取ったり(する)。	大きいことはないと思う。ウインナーが嫌いみたいで、しつこく入れてくる。あまり残さないが。おしっこももらさなくなったのでいいかな。
		願い			クラスに目が向き始めているので、クラス内のかかわりを深めていってもらえればいい。	いろんな部分でしっかりしてきていて、豊かなので、どんどんクラスに持ってきてもらいたい。他の子に与えてほしい。いろんなことをみんなと楽しんでもらいたい。必要なものを必要な分だけ持ってほしい。	うんと安定しているの、クラス変わっても落ち着いてやっていけるのでは。新しい友だちを作ってたくさん関わってくれれば(いいと思う)。身の回りも心配することがないで。	今の調子で幼稚園生活をくれば。みんなを引っ張ればそういう部分も出てくれれば。
担任不変	OS1	様子			今まで一緒のご近所さん、Y H 1と遊んでいることが多い。幼稚園を楽しみにして通っている。剣を作ったりとか、自分のやりたい遊びを見つけて遊んでいる。体も動いてにこにこして遊んでいる。	喜んで楽しいようで、良く食べてよく寝て。Y K 1と一緒にいる。遊びたい遊びがあるようで、そこに遊び始めているよう。気の合う遊び、友だちができてきた。目的ができた。	楽しく過ごしてきたよう。毎日自分もしたい遊び、友だちがいて、活動的に遊んでいた。ご飯食べたら、次遊び、何したら次遊びとかかまってきた。作ってほしいとか、作ってほしいものも出してきている。	H組さんのときからのY K 1とクラスが分かれたが、ぼちぼちくらいで、クラスの中で遊んでいけた。くずれることなくこれた。できるようになることが増えたのか、楽しいみたい。体を動かして、できなかったことができるようになったことの頑張りがある。
		気になること	h	y	特にない。	Y H 1と楽しみながら他の子と交えて遊べるようになれば。いろんなことの経験ができるといいのかな。喜んできているので、遊べればいいと思う。	遊びの幅を広げてほしい。いろんな遊びに挑戦していくと、幅が広がってくる。経験の少ないものにもたくさん関わってくれればいい。	楽しくやっているのでそんなにない。
		願い			自分のことが自分でできているようになれば、遊びが広がってくるのでは(ないかと思う)。いっぱい経験してもらえれば。	Y K 1と楽しみながら他の子と交えて遊べるようになれば(いい)。いろんなことの経験ができるといいのかな。喜んできているので、遊べればいいと思う。	遊びの幅を広げてほしい。いろんな遊びに挑戦していくと、幅が広がってくる。経験の少ないものにもたくさん関わってくれればいい。	幼稚園の遊びが楽しめれば(いい)。友だちを引っ張っていき、誘えるようになれば(いい)。
	NA2	様子	b	z	比較的元素がいい女の子。落ち着かない部分は、不安のため(だろう)。いろんなこともしっかりしてて物覚えもいい。関わりはそんなになのでこれから(の部分が多い)？	大分、自分で、1人の遊びから集団に向き始めた。運動会とかみんなでまとまる経験を通して得た気がする。みんなで遊ぶ時間の中で関わりが強かった。さばさばしているの、男の中でも平気(で遊んでいる)。女の子とも、関わりが増えてきている。	3学期、ちょっと少し不安定なところがあったのかって。ひなまつり会前後、うちに帰りたいとか、落ち着かないところはあった。友だちの関わりの増えてきたとかは、成長してあったのかと思う。	ピアノが大好き。4月に入ってからいい感じ(で過ごしている)。起伏が激しいタイプだが、母が来て泣く回数が増えた気がする。参観日とか、帰り際泣いている印象がある。でも、いろんなことはよくできて、渡り棒H組さんのときにできていた。ひとり先に逆上がりをし、長縄も、短縄跳びにもいっている。絵も上手だし、折り紙もできるし、何でもできる。最近では友だちと遊ぼうというのに向いてきて、そういう部分では落ち着いて遊べるようになった。
		気になること	b	z	友だちとの関わりが、他の子に比べて薄いのが気になる。	こまかいことが気になる。取り除かれるまで不安定になってしまう。朝のバスも押されるのがやだと乗れなくなる。声をかけてみるとか、押すようだったら、先生に言ってくれればいいのに、引っかかるかと立ち直れない。	不安定な部分がちょっとあるのかなというところ。N A 2自身は、物事をマイナスにとらえてしまう。こういうことあったから幼稚園はやだと考えちゃう。強いタイプが多いので、押されちゃう部分がある。うまくケアしてあげられれば(いい)。	起伏の激しさ(が気になる)。スイッチのオンとオフが分らない。急に泣き出したりとか。その辺がちょっとだけ(気になる)。何でもできるので、日常生活は気にしてない。
		願い	b	z	女の子に気持ちいい向いてないし、男の子ともかかわりがないので、ちょっとずつ関わりが出てくれば(いい)。	大分クラス内に目が向いてきているので、友だちとの関わりが増えてきて、遊びたい子を見つけたのもいいし、そんなこと関わる中でたくさん経験を積んでほしい。	本人自身の不安定な部分が減って楽しいと思ってきてほしい。この子というのが確立してなかったり、遊びの中でもこれというのが決まっていなくて、友だちとの関わりが濃くなってくれば(いい)。	調子よく来ているので、いろいろは気にならない。ちょっと気持ちの上がり下がりがあるけど、もうちょっと穏やかになると、周りも関わりやすくなると思う。それが周りからも見えるので、そういう部分と他の子とじっくり深く関わり切れてない部分もあるので、そういう部分が増えてくるといい。

IDの数字のうち、1は男児、2は女児を示す。以下も同様である。

Table 3. 各パターンの事例(2)

移行パターン	ID	質問	年少 時ク ラス	年中 時ク ラス	T1	T2	T3	T4
担任変化	FM2	様子	b	y	初め泣いたくらいで、母と離れることも抵抗はなかった。比較的穏やかにやっている。女の子が少ないクラスで、女の子の友だちがほしいタイプなのに、一緒にできる友だちが少ない。先生の近くにいることが多かった。	成長した。1学期は先生にべったり(くっついていた)。クラス内がまとまってきた中で、遊ぶ友だちができて楽しくなり、笑ったり、話したりできるようになった。自己主張も出てきて、思いを出して遊べるようになった。かたづけも率先してやるうという思いもある。前向きにやってくれている。	自分を出せるようになった。本領発揮してきた。口が達者。うんとしゃべるようになった。感情をストレートに出すようになった。自分を出せるのはいいが強すぎたり、気に入らないとき聞かないと実力行使に出たりがある。それ以外はいろんなことができる。友だちに対する思いやりはあるが。	クラス替えで担任も替わり、波に乗れなかったが、張り切る部分があるとやってきた。2組先生への思いが強いのか、どっかで調子が狂っている感じ(がある)。Y組の中で、2組になりたい思いが強い。
		気になること			そんなに気になることはない。	すこし気分が波があるというか、一度調子が上がってくれば、誘って遊べるが、タイミングを外すと難しい。乗り遅れても遊ぼうとか、入れてとかできればいいと思う。	強さが強くなってきた。言葉とかがきつかったり、やだと飛び出してみたりがちょっとあるので、その部分もう少し変わってくれば(いい)。	基本的に登園が遅い。あとは、やらないと決めたことはやらない頑固さがある。鉄棒とかは(やり)に來たりするが。
		願い			クラスの中でも関わりが向いてきて、自分から声をかけるのができるようになり、友だちと関わるようになってほしい。	自分を出せるようになってきたので、自分を発揮して友だちと関わるようになってくれればいい。	クラス替えしてどうなのか、しほむかもしれないが、強い部分が違う方向に変わったりしてくれればうんというと思う。もともとしっかりしているの、感情をどう出していくかというのが大切だと思う。	幼稚園の存在場所もできてきたので、出せる場所が増えてくれば(いい)。女の子が固まりだしてきたので、その中で遊べれば(いい)。
	YK1	様子	h	z	最初緊張していた様子があったが、OS1につられて遊んでいるうちに慣れた。時々お母さんにはちょっと(園での様子を)話したりするが。	基本的には元気が、なんか言われるとしゅんとしたり(する)。楽しく来ているのでいいかな。OS1との遊びが楽しい。OS1がいるから頑張れる。いっぱいいっぱい頑張っている。2人で頑張っている。おはしの使い方、お弁当が上手になり、こぼさなくなった。	3学期は、楽しく活動的に動いていた。ケガもあったが、体を動かして遊んだり、OS1と。いろんなものを作ったりもよくしていた。遊びたいからごはんも早く食べる。	4月当初とても困っていた。あえて離した、最初は誰と遊んでいいかわからなかった様子だった。元日組の子と遊んでいる中で、ちょっとずつ性格とか様子とかを見て、誰と仲良しになろうかなと見て、新しい友だちと仲良くなってきた。うちでも楽しいと話したり、今日は遊べなかったと話さずともある。仲の良い友だちができて、楽しく、楽しく通えるようになってきた。だいたい調子を取り戻してクラスに入ってきた。負けず嫌いで頑張っている。
		気になること			大きいことではないが、お弁当(を食べるの)が上手でなく、こぼす。面と向かって発表する時とか緊張するのか、自分が出せないところがあるが、慣れてくれば(たぶん大丈夫である)。時々手が出るかなというはあるが、たいしたことはない。	よく遊んでいるが、手が微妙に出る。うまく発散できないと、手が出たりするので、言葉で話ができるようになれば。	自分かと思うと、それから変えられないっていうか、頑ななところがある。いい面と悪い面がある。融通が利かない面がある。	頑でなくなったが、好きと嫌いははっきりしている。母からも、そういうことがあったと聞いた。実際クラスの中で見てても、そういう部分もある気がする。それでもだいぶん少ずつ本人なりに関わってくるようになった。
		願い			幼稚園楽しく来てもらうのと慣れてきたので、自分を出して経験していってもらえれば(いい)。	喜んで来ながら、もっと友だちを広げていってくれば(いい)。楽しんでくれば広がる。母にも話してくれるのでわかりやすい。乗り越えて成長してくれば(いい)。	OS1以外の関わりが増えてきたので他の子ともっと遊びを広げてもらえば。他の子の思いと絡んで遊べれば、頑なじゃない部分も変われば嬉しいと思う。	折り紙も上手だし、ひらがなも読めるしいろんなことができる子(である)。できることはやってほしいし、好き嫌いのない部分もあるし、頑張っている部分もあるし、やればできるタイプなので、できることを見つけてほしい。
年中新入園	KY1	様子	—	y				何となくどうしようというか、不安がいつぱいあった。口も聞かなかつたり、泣き出した(する)。ひとつひとつ慣れてきた。これからという気がする。
		気になること						休みが続くと調子が出ない。今日も悲しかった。そこに行つて遊びたいのか、くっついていたりしたが、口に出せないことがある。
		願い						いろんなこと、初めてのことがあるが、やっていく中で友だちとの関わりも持っていければ、夏休み明けも大丈夫かなというのがある。今までのうちの中で多かった気がする。
	TK1	様子	—	z				4月から入園して、泣くとも予想していたが、仲良しがすぐできた。幼稚園生活に受け入れた。ついていくしかないの、ついてきて、楽しいことを見つけてやってきた。ここ最近のが機嫌で、頑張った反動が来た。先生のそばにいたり、先生が絵本遊びに行ったらついてきたりとか。プールも、〇つけてあるので、入るがやりたくないうちで書いたりとか、無理しないようにと、おうちのひとと話した。一思ついで2学期やっていければと思う。
		気になること						最近の様子少し気になる。友だちとも仲良くしていたり、登園しづりとかはないが、にこにこしているし、にこにこするだけじゃなくて、伝えたい気持ちを出してきているのがある。ちょっと不器用。制作活動が上手じゃない。顔が形にならない。思い起こして描くというのができない。プールの絵も、謎の顔になった。折り紙もとんちんかんの方向に行ったり。
		願い						今まで頑張ってたかなという印象があるので、そんなに頑張らなくてもという部分があり、無理のないように(していきたい)。友だちとはいい関係なので、仲良くしつつ、やりたくない、したくないとも言えるようになるという、困ったこと、とか言えないので、言ってきてほしいと思う。



園の子どもは、「なじむ」のに困難さがあったのは1名のみであり、他の4名は、スムーズに園生活もしくはクラスになじんでいた。

Table 3 に、T 1 から T 4 にかけての経過パターンの代表例を示した。それぞれの子どもに対する具体的なコメントを見てみると、ほとんどの子どもで1学期の間に新しいクラスへなじんでいく様子がうかがえた。「なじむ」ためには、新しいクラスでの友だち関係を築くことや新しい担任との関わりが重要であることが述べられた。

例えば、Y K 1 では、T 4、即ちクラス替え後の年中1学期の様子として、「あえて離れた」というようなコメントも述べられている。これは、友だち関係の固定を防ぎ、拡がることを願ってのことのようである。そのことにより、一時的に調子を崩す子どもも存在した。その間、元のクラスの友だちと遊んだり、クラスの中での居場所を見つけるような行動が見られたりしている。しかし、これは一時的なことであり、その後新しい友だちをクラスの中で見つける

ことにより、安定が見られた。

それに対して、担任が変わらず、年少時 Y K 1 と仲が良かった O S 1 は、新しいクラスにもスムーズになじんでいる。

また、満3歳で前年度から入園している子ども(I A 2)では、年少1学期において、前年度の年少クラスの仲間との関わりが多かったことが述べられている。彼らは、園生活を他の子どもよりも約1年前から経験している。しかし、クラスメイトも担任も新たな存在である。園生活そのものは慣れているが、クラスでの関係を築いていくという点では、他の子どもと同じである。T 1 では、前年度同じクラスだった現年中児との関わりが多いものの、徐々に新しいクラスメイトとの関係を作っていくことが述べられた。それは、他の年少児の友だちと関わるスキルの上昇ということにも関係するかもしれない。他の子どもたちにとって、I A 2 は魅力的な存在であり、いろんなことを知っている。保育者は、T 1 で I A 2 自身の目がクラスに向くことを願い、T 4 ではクラスメイトを引っ張ってくれることを願っている。

年中からの新入園児(例えば、K R 2)では、年少での入学時が年少1学期で述べられたこと、例えば、排泄などの生活習慣や園生活になじむことが述べられていた。

これらのことから、クラスが替わることで、子どもたちには、さまざまな乗り越えていかなければならない課題が生じると思われた。最も大きなことに、担任の変更があることが示唆できる。しかし、保育者のコメントから、他の要因も考えられた。それは、友だちの存在である。上記の通り、保育者のコメントから、年少時のときの関係を「あえて離れた」という場合も存在する。もう1つ考えられるのは、子どもの持つ気質である。これらの組み合わせで、新しいクラスにどうなじんでいくのかがある程度予測できるかもしれない。

Table 4. 「気になること」についての  
コーディング名とコメント例

コーディング名	コメント例
不安定	気分的な波が大きい。こだわりが強い。これをしてほしいけど、できなかったという友だちのをあげたり、いじけたりする姿がある。話をしたり、思いを言葉で伝えれば対応が変わると思う。
関わり	友だちどうしのトラブルが多い。しっやいけないうこととか正義感を持っていてくれるが、手段がおぼつかない。言葉で言えなかったり、手が出たり。
片付け	身の回りのことができてなくて、お姉ちゃん、お母さんもいるので、生活習慣が身に付かない。繰り返して言わないと同じ。お弁当の片付け、着替えとかもなかなか身に付かない。
排泄	なかなかトイレがうまく…仕方がないが、もらってしまった。着替えが多い。本人も苦労しているなという感じ。手先が上手に使えるのか、つまんでいるのができないのが大変そう。
食	はしとか上手でなかったが頑張った。ごはんにはむらがある。食べれる日と食べられない日がある。
ふざける	調子に乗ってしまうというか、楽しくやっているが、度を越えることがある。場の空気とか、調子に乗ってかなというのがある。
言葉	言葉ははっきりしないので、意思のやりとりが難しい。友だちとのトラブルが若干多い。うまく口で言えない。
ペース	すごくスローリー。マイペースで、自分のペースがある。
失敬	いいなと思うのを隠したりが出てきている。大量の折り紙を持って行ってしまった。友だちの持っているティッシュを知っているのに持っていった。言われると返したり。手癖が気になる。
伝える	先生に本音を出してこないタイプ。見えない部分が多くて、楽しいとおうちでも話しているが、その一面が見えてこない。先生に見えていない部分があるので、変な方向にいかないでほしい。
幼さ	まだちょっと、ほわわんというか幼いのか、明らかに友だちのものなのに、どうしてもほしいととってしまう。ほしいというだけでとった。結局泣いたり。ほしいほしいものはほしい。もうちょっとそこ部分。
頑固さ	ちょっとかたっ子なのかな、決めると動かないことがある。こうしたいという思いが強いのか、緑色が好きならそれとか。
不器用	製作が上手じゃない。折り紙とかもどンドン先に折ろうとする。絵とかも、手をかけないで、絵塗りつぶしたりしないでふわふわと終わりにした。その辺根気よくやってくれれば。
なし	(「特にはない」というコメント)

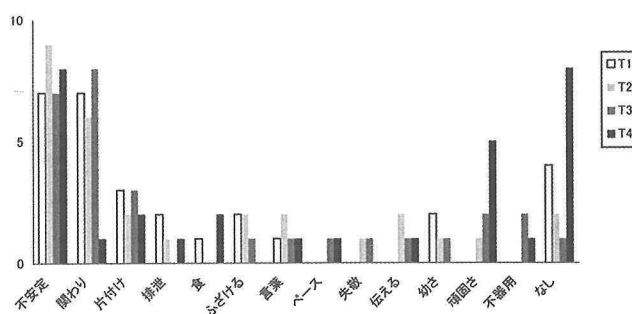


Figure 3. 「気になること」についての内容



Table 5. 「来学期への願い」についての  
コーディング名とコメント例

コーディング名	コメント例
関わり	自分を出せるようになってきたので、自分を発揮して友だちと関われるようになってくれればいい。
集中	お話を聞くとときか集中力が弱い気がするので、その辺は集中できるようにやっていければいい。
楽しく	園に慣れて楽しんで遊んでもらえればいい。
表現	先生に対しても、時々言ってくれるときもあるが、もっといろんなことを発してくれたり、何でもいいので、いろんなことをためらわずに出してくれたら嬉しい。
排泄	排泄が完全でないで、そっちをしっかりとやりたい。
貢献	いろんな部分でしっかりしてきていて、豊かなので、どんどんクラスに持ってきてほしい。他の子に与えてほしい。いろんな子とをみんなと楽しんでほしい。
安定	もう少し精神的な成長が見込めればというのが一番大きい。感情コントロールができないということなので、前よりはいいが、もうちょっとがまん強く。
チャレンジ	遊びの幅を広げてほしい。いろんな遊びに挑戦していくと、幅が広がってくる。経験の少ないものにもたくさん関わってくれればいい。
運動	いいなと思うのを隠したりが出てきている。大量の折り紙を持って行ってしまったり、友だちの持っているティッシュを知っているのに持っていったり。言われると返したり、手癖が気になる。
ペース	ペースが、もうちょっとと何とかなれば、お弁当だけは（もうちょっと早く食べてほしい）。

### 3. 子どもについての「気になること」と「来学期への願い」

子どもの「気になること」について、Table 4 に従って、コーディングを行った。子どもによっては、①「これまでの様子」で述べられた場合もあったので、そのときは①を元にコーディングを行った。また、複数述べられたときは、最初に述べられたものをコーディングの対象とした。その結果を示したのが Figure 3 である。

T1 では、関わりと不安定が述べられた割合が高かった。関わりについては、T4 になると大幅に減少している。それに対して、不安定はあまり増減なく多いままである。また、T1 では、排泄、片付けなど生活習慣に伴うことが他の時期に比べて多く述べられている。これらのことから考えると、関わりや生活習慣に関することは、園生活を経るごとに現象する傾向があるが、不安定は子どもが元々持っている特徴としてあまり変化がないことであると考えられる。

同様に、「来学期への願い」についても、Table 5 に従って、コーディングを行った。その結果を示したのが Figure 4 である。T1 では、楽しくというのが圧倒的に多く述べられている。これは、まず園生活、クラスになれるということがその後の園生活の大前提になるからであろう。T4 でも、この楽しさというのが T2、T3 と比べれば多く述べられている。新しいクラスになり、同時に年中からの新入園児が存在する

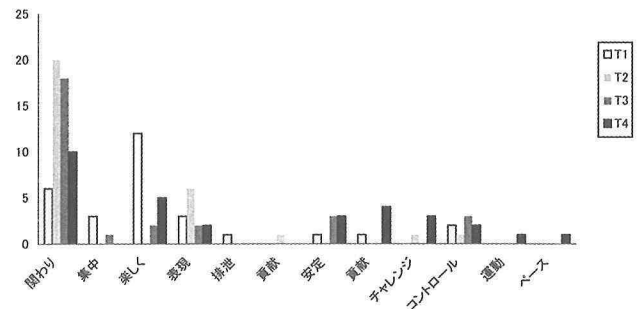


Figure 4. 「来学期への願い」の内容

ために、T1 と同様の傾向が見られるのだと思われる。他に多いのは関わりである。それだけ園生活における関わりということが重要であるということである。

これらのこと、即ち「気になること」と「来学期への願い」について、子どもごとに示したのが Table 6 である。これを見ると、「気になること」については、学期ごとの変化はさほど見られない。変化がある場合は、T1 で生活習慣に問題がある場合（例えば I A 2）やコーディング項目同士で関連する場合（例えば、K K 1 で「関わり」と「伝える」）である。

それに対して、「来学期への願い」では、時期による変化が大きい。T1 では、生活習慣に関すること（例えば T S 1 など）や、「楽しく」、つまり園に「なじむ」こと（例えば M D 1 など）が多く、時期を経るに従って、「関わり」が増え、T3・T4 では、「貢献」、即ち、クラスの他の子どもの刺激となってほしいというようなことが出現した。

### 全体的考察

幼稚園に入園するということは、子どもにとって初めての集団生活であり、初めての移行体験（石川、1998）である。入園した子どもすべてがスムーズに園生活に入り、新しいクラスになじんでいるわけではなかった。約半数の子どもは、母親と離れにくかったり、泣くというような行動を示していた。しかし、ほとんどの子どもで、1 学期の初めのうちにこのような行動は消え、園生活、そしてクラスになじんでいた。

このことから、保育者は、子どもたちを見る視点として、入園時には一人ひとりが園になじむことを重要と見ており、まず最初に、生活習慣に関する一人一人の問題に目が向いていた。これらのことが確立されて初めて、クラスとしての友だち関係が重要になってくると思われた。ある意味では保育の出発点は人間関係であり、それゆえに保育者はそこに心を砕くのであろう（原野、2003）。

Table 6. 「気になること」と「来学期への願い」の個人ごとの流れ

I D	年少 クラス	年中 クラス	「気になること」				「来学期への願い」			
			T1	T2	T3	T4	T1	T2	T3	T4
I A 2	b	y	排泄	失敬	失敬	なし	関わり	関わり	貢献	貢献
KK1	b	y	関わり	伝える	伝える	関わり	集中	関わり	関わり	表現
HK1	b	y		関わり	関わり	頑固さ		関わり	関わり	関わり
FM2	b	y	なし	不安定	頑固さ	頑固さ	集中	コントロール	関わり	表現
MY1	b	y	不安定	不安定	不安定	不安定	集中	安定	チャレンジ	関わり
MS1	b	y	不安定	不安定	不安定	不安定	コントロール	コントロール	コントロール	コントロール
OS1	h	y	ふざける	ふざける	幼さ	なし	貢献	関わり	貢献	関わり
SH1	h	y		言葉	不安定	不安定	楽しく	関わり	運動	関わり
NR1	h	y	食	不安定	なし	なし	楽しく	関わり	楽しく	関わり
NY1	h	y	片付け	片付け	片付け	なし	楽しく	関わり	楽しく	関わり
FMo2	h	y	排泄	なし	ペース	食	楽しく	関わり	楽しく	関わり
MM2	h	y	関わり	伝える	関わり	頑固さ	関わり	関わり	関わり	関わり
YH1	h	y	関わり	頑固さ	関わり	ペース	楽しく	関わり	ペース	関わり
KKo1	—	y				食				関わり
KY1	—	y				不安定				関わり
KR2	—	y				排泄				関わり
KT1	b	z	言葉	言葉	言葉	言葉	表現	表現	関わり	表現
SF1	b	z	関わり	関わり	関わり	不安定	関わり	関わり	楽しく	関わり
TS1	b	z	関わり	関わり	関わり	なし	排泄	安定	チャレンジ	表現
NA2	b	z	不安定	不安定	不安定	不安定	関わり	安定	安定	関わり
MS2	b	z	不安定	不安定	不器用	不安定	安定	関わり	関わり	関わり
MH1	b	z	幼さ	幼さ	片付け	片付け	関わり	集中	楽しく	関わり
AT1	h	z	ふざける	ふざける	ふざける	なし	関わり	関わり	安定	関わり
NRy1	h	z	片付け	片付け	片付け	片付け	表現	表現	表現	表現
FS1	h	z	なし	なし	不安定	なし	楽しく	関わり	安定	関わり
MD1	h	z	不安定	不安定	不安定	不安定	楽しく	関わり	チャレンジ	関わり
MSa2	h	z	不安定	不安定	関わり	伝える	楽しく	関わり	コントロール	関わり
YK1	h	z	関わり	関わり	頑固さ	頑固さ	表現	関わり	貢献	関わり
WR2	h	z	関わり	関わり	関わり	なし	楽しく	コントロール	貢献	表現
AM2	—	z				頑固さ				関わり
TK1	—	z				不器用				チャレンジ

\*IDの最後の数字は、1：男児、2：女児を示す。

そして、クラス替えが行われると、子どもにとっても、保育者にとっても、再び「新しいクラスになじむ」ということが課題になる。子どもは、再び新しい環境への適応が求められた。言い換えれば、子どもは、移行体験をすることになる。しかし、入園時と異なるのは、新しいクラスの状況として、3つのパターンが存在することである。即ち、担任が変わらなかった子ども、担任が変わった子ども、新入園の子どもである。この中で、担任が変わった子どもの方が新しいクラスになじみにくかった割合が高かった。このことと同様のことが年少時にも見られている。それは、前年度から満3歳で入園し、再び年少クラスを経験した子どもである。彼らは、他の子どもよりも1年早くから園生活を経験しているが、クラスになじむのに少々時間がかかっている。新しい友だちと関わるより、前年度同じクラスだった子ども、つまり1つ学年が上の年中児と関わっていることが1学期の始めでは多かった。

これらのことから、子どもにとって、人的環境が重要であることがうかがえる。特に、担任保育者の存在は、クラスになじむ上で大きいことが示唆された。高濱(2003)が言うように、子どもたちは、日々

の生活を通して保育者についての理解を広げたり、深めたりするのであろう。もちろん、仲が良かった子どもと離れたことによって新しいクラスになじみにくかった子どもも存在したのだが、全体的には保育者の存在が子どもの支えになるように思われた。

また、年中時の新入園児は、他の子どもの年少入園児で見られたようなコメントが見られた。即ち、排泄などの生活習慣や園に「なじむ」ということが述べられている。保育者の願いにおいても同様で、関わりを作っていくことが重要であることがうかがえる。

こうした年中時のクラス替えによる新しいクラスへの適応は、年少時と同様に1学期の間に解決され、新しいクラスでの新しい友だち関係が築かれていった。保育者の視点も同様であり、まず新しいクラスになじむことが重要であり、それには新しい友だち関係が築けるかどうか大きな意味を占めると思われた。

ところで、クラスには、さまざまな子どもが存在している。保育者の子どもに対する「気になること」は、意外と変化がなかった。元々子どもが持っていること、不安定さや関わりに対する問題というもの

は、なかなか変化が見えにくいものなのかもしれない。当たり前のことであるが、子どもの「気になること」から願うことが生じ、子どもに変化が見られた場合、子ども個人のことから集団の中の子どものあり方といったクラス集団への関与を求めていると思われた。これらのことからすると、保育者の「子どもへの願い」は、子どもからのみ発せられていないように思われた。それは、時期による保育のねらいが関係している。まず1学期では、「楽しく」通園する、つまり園に「なじむ」ということが大前提であることがわかる。また、排泄など、基本的生活習慣が整っていることも重要である。それらが確立されて初めて、つまり1学期中盤から2学期になると友だち同士の関わりが重要になってくる。ここで、クラスの中の仲間関係が保育として重要になるわけである。そして、年中になると、子どもの中には、リーダー的タイプが存在し、彼らには、クラスの雰囲気を作り出したり、新しい遊びをクラスに持ち込むというような役割を求めるようになるのである。

これらのことから、子どもにとって、幼稚園に通うことにおいて「クラス」集団というものが単位として大きな意味を持っており、そのクラスに属するということが大きいのではないかと思われた。ただし、入園時より年中時のクラス替え時の方がなじめなかった子どもは少なかったが、同じ園に通うのでも、クラスが異なるだけで新たに「なじむ」という意味がある場合があると思われた。特に、クラスに「なじむ」には、保育者の存在が大きいことが推測された。同時に、友だちの存在や本人の気質もクラスになじむことに関係すると思われ、これらの組み合わせによって、クラスになじんでいくのかが予測できそうである。

以上のように、保育者にとっても、子どもにとっても、クラスの枠組みは重要であり、クラスが完成するまでは、他のクラスの子とも関わることもあるが、徐々にそのクラスの中での関わりが多くなっていく傾向がある。これは、結城(1998)が言うように、「〇〇組さん」と呼ばれることや、クラス単位での活動を通して、徐々に、子どもにとって行動範囲の枠として存在するものではないかということが考えられる。

ただし、これらは、ある1学年を追跡しただけであるため、結論を出すには早急すぎると思われる。他の対象者で検討を行ったり、本研究の対象者をさらに縦断的に追跡することも必要であろう。今後の課題としたい。

## 謝辞

M幼稚園の先生方にはいつもお世話になっております。貴重な時間を割いてお話しいただいたことを深く感謝申し上げます。

## 文献

- 芦田宏 2009 「第2章 領域「人間関係」の考え方」  
小田豊・奥野正義(編著) 『保育内容 人間関係』  
北大路書房。
- Bronfenbrenner, U. 1979 The ecology of human development. 磯貝芳郎・福富謙(訳)  
1996 『人間発達の生態学:発達心理学への挑戦』  
川島書店。
- 浜口順子 2001 「第2章 乳幼児の理解と保育方法」 森上史朗・渡辺英則・大豆生田啓友(編) 『保育方法・指導法の研究』 ミネルヴァ書房。
- 原野明子 2003 「第2章 2節 仲間関係の形成」 無藤隆・倉持清美(編著) 『保育実践のフィールド心理学』 北大路書房。
- 今井和子 1992 「第3章 ひとりの子どもと集団の育ち」 森上史朗・今井和子(編著) 『集団ってなんだろう:人との関わりをはぐくむ保育実践』 ミネルヴァ書房。
- 飯島婦佐子 1991 3年保育児と2年保育児の対人行動 日本発達心理学会第2回大会発表論文集, 158.
- 石川悦子 1998 「第1章 家庭から幼稚園, 保育園へ:3歳児の移行体験と危機」 会沢勲・石川悦子・小島明子(編著) 『移行期の心理学:こころと社会のライフイベント』 プレーン出版。
- 岩崎基次 2009 「第6章 2節 幼児の仲間づくりと保育者のかかわり」 小田豊・奥野正義(編著) 『保育内容 人間関係』 北大路書房。
- 上垣内伸子 2009 「第5章 発達の理解と教育課程の編成」 小田豊・神長美津子(編著) 『教育課程総論』 北大路書房。
- 厚生労働省 2008 幼稚園教育要領解説  
文部科学省 2008 保育所保育指針解説書  
無藤 隆 1992 『子どもの生活における発達と学習』 ミネルヴァ書房。
- 永田陽子 1992 「第6章 集団が育つための保育者の役割 3. 保育者の役割とは」 森上史朗・今井和子編著 『集団ってなんだろう:人との関わりをはぐくむ保育実践』 ミネルヴァ書房。
- 大野和男 1998 転入児における仲間関係の形成過程 東京都立大学心理学研究, 8, 1-8.
- 大野和男 2005 保育者の視点から見たクラス集団:類似度による子どもの発達と集団の変容 松本短期大学研究紀要, 14, 1-12.

- 大野和男 2007 年中から年長にかけての幼稚園  
での子どもの発達：あるクラス集団における子  
ども同士の比較からの検討 松本短期大学研究  
紀要, 16, 5-18.
- 大野和男 2008 年中から年長にかけてのクラス  
集団の変化と子どもの発達 松本短期大学研究  
紀要, 17, 3-17.
- 大野和男 2009 保育者の視点から見た子どもに  
とっての1学期 松本短期大学紀要, 18, 3-21.
- 高濱裕子 2003 「第3章2節 幼児と保育者の  
出会い」 無藤隆・倉持清美(編著) 『保育実践の  
フィールド心理学』 北大路書房.
- 多々内三恵子 2001 「第7章 3歳児の園生活」  
森上史朗・大豆生田啓友(編) 『保育内容総論』  
ミネルヴァ書房.
- 氏家達夫 1996 『子どもは気まぐれ：ものがた  
る発達心理学への序章』 ミネルヴァ書房.
- 結城 恵 1998 『幼稚園で子どもはどう育つか：  
集団教育のエスノグラフィ』 有信堂.